

「明日からすぐに使えるマルチレベルアプローチ (包括的支援) で不登校対策」

神戸親和女子大学 金山 健一 教授

1 はじめに

(1) ハイタッチ

全員起立して、5, 6人でパンパンと手をたたき合う。「がんばるぞ」でハイタッチをする。

(2) 自己紹介

3人組、2分間で自己紹介をお願いします。

2 日本が、危ない

今日のテーマは、「不登校」です。小学校、中学校、高校では不登校とっていますが、最終的には引きこもってしまうということを念頭にどうしたらいいの?という話をしたいと思います。

引きこもり親の会で出したデータでは、引きこもりは164万人、NHKでは160万人と出しています。相当数の引きこもりがいるということです。

日本が、危ない

・ 引きこもり	54万人	(内閣府 2015年)
・ ニート	56万人	(内閣府 2015年)
・ フリーター	155万人	(内閣府 2015年)
・ 不登校(小・中)	12.6万人	(文部科学省 2015年)
・ 不登校(高)	5.0万人	(文部科学省 2015年)
・ 高校退学者数	4.9万人	(文部科学省 2015年)
・ 加害児童生徒数	5.6万人	(文部科学省 2015年)
・ いじめ(小～高)	22.5万件	(文部科学省 2015年)
・ 少年犯罪	4.0万人	(警察庁 2015年)

計319.6万人

3 学校で大切なこと

① 学校で一番大切なことは、教員が「同じ山に登る」ということです。まず、皆さんにお聞きしたいのですが、「先生方の学校は、先生方同士、仲がいいですか?」荒れている学校は、先生方の仲が悪いことが多いです。「同じ山に登る」とは、教師が同じ方向性を持って、子どもたちを育てるということです。教師同士の仲の悪い学校ほど、生徒指導は荒れています。そんな学校は教師がバラバラで、同じ山に登ろうという気すらありません。生徒指導が大変な学校でも、皆で同じ山に登っていると実感できる時、教師は耐えていけます。しかし、教師が孤立し、問題を抱えこむと、うつ病になったりします。現実、教師の精神疾患は急増しています。

学校で一番大切なことは、ズバリ、「職員室の雰囲気良さ」。

しかし、そんな学校は、あまり多くはないのが現状でしょう。学年セクトがあつたり、校長と職員の間が悪い、学年主任同士が不仲の場合もあります。

教師にもいろいろな個性があり、得手・不得手があります。その得意なこと、強みを総動員して、同じ山に登るのです。弱味を総動員しては、皆が疲弊してしまいます。各々が同じ山に登れるように、マネジメントする力が大切なのです。マネジメントは、校長だけの仕事ではありません。校長のマネジメントは、教職員それぞれの強味を生かすこと。逆に、校長・学年主任をマネジメントするとは、校長・学年主任の強みを

- ① 同じ山に登る=(ベクトル)をそろえる
- ② モグラ叩きの生徒対応から**予防的**な生徒対応へ
- ③ ホームランバッターより**3割バッター**
- ④ 学校の力=教師の力量の総和×(組織)力
- ⑤ 進路指導・学習指導は**極上の生徒指導**
- ⑥ 子どもと子どもをつなげる(ソーシャル・ボンド)

生かすこと。「同じ山に登る」ためには、精神論だけではなくて、学校の進むべき地図や羅針盤が必要です。

② 「モグラ叩きの生徒対応から予防的な生徒対応へ」は、マルチレベルアプローチの一つの流れです。マルチというのは「いろんなレベルに応じて」ということです。いじめが起こってから、不登校が起こってから、何か起こってから対応しようとする、多大な労力が必要となるため、予防的な対応をしようということなのです。

③ 「1人のホームランバッターより、多くの3割バッター」がいるチームは強いです。ホームランバッターの先生が、一人で学校を支えている学校は、弱い学校です。その先生がいなくなると学校は、総崩れになる場合があります。バントの得意な先生、守備のうまい先生、盗塁のうまい先生、声の出すのが得意な先生・・・いろいろな先生方がいる学校が強い学校です。つまり、先生方が個性を発揮できている学校が強いのです。みなさんは、学校で個性を発揮できていますか。

④ 「学校の力」というのは「教師の力量の総和×組織力」だと考えています。

教師の力量の総和は、A先生の力+B先生の力+C先生の力・・・です。

さらに、組織力は掛け算なので、組織力が0だと全てが0となります。組織力を2倍、3倍、4倍に向上させる必要があります。

では、誰が組織力を向上させるのでしょうか。校長先生だけでなく、気づいた人が組織力を向上させることが必要なのです。若い先生でも、学年主任でも、生徒指導担当でも、養護教諭でもいいのです。いろいろな先生方が、少しずつでも組織力を上げることが重要なのです。これからの先生方には、組織力を向上させる、プロデュースやコーディネートができる力量が求められています。

⑤ 進路指導・学習指導は極上の生徒指導と考えています。荒れた学校に勤務していた時、授業に出ないで廊下を徘徊する生徒がいました。彼らは、事件を起こし、数名が少年院に入りました。彼らが20歳になった時に再会し、「中学生のとき、何で教室に入らないで、廊下を徘徊していたのか」と聞きました。彼らの答えは、「勉強したら、バカばれる。だって、九九もわからないし、アルファベットもわからない」でした。私は、反省しました。彼らも、勉強がわかりたかったのです。どんな子どもたちも、勉強がわかりたいのです。

私は、そのときから、「学習指導は良質な生徒指導」と確信しました。

進路指導も、極上の生徒指導です。勉強が苦手、いつも非行グループにいる生徒がいました。「先生、オレ、まったく勉強わからないけど、高校に行けるかな」「大丈夫、先生が勉強教えてあげるから」この言葉で、彼は救われ、なんとかギリギリの悪さで卒業し、高校に行きました。どんな子も高校に行きたいのです。「お前は、もう、高校には行けない」といった時点で、荒れはひどくなっていきます。たとえ、現実、高校に行ける状態でなくても、進路の夢は、断ち切らせない方がいいです。

⑥ 子どもと子どもをつなげる、つなげることをソーシャルボンドと言います。つまり不登校を防ぐ一番のポイントは、意図的にソーシャルボンドづくりをすることです。いじめも同様で、誰かと誰かがつながっていればいじめはひどくならない。意図的に人間関係をつなげていくことが重要です。

保護者ともソーシャルボンドが必要です。問題は初期対応で8割決まります。モンスターペアレントと言われる保護者でも、初期対応を失敗しなければそれなりに治まっていくと考えています。

教師と生徒のソーシャルボンドでは、褒めることを重要視しています。まず本人を直接褒める、それから

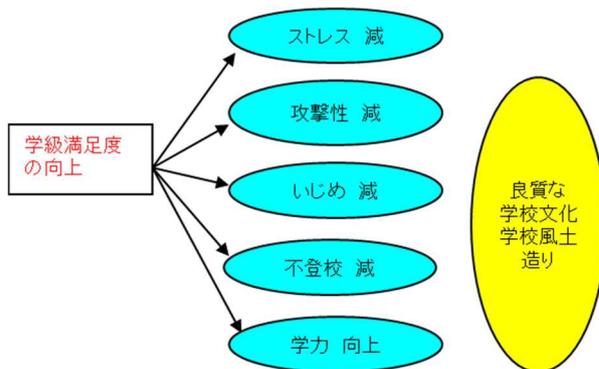
本人と仲間の前で褒める、本人が忘れた頃にもう一度褒めます。ほめると脳からドーパミンが出て、また同じ行動を取りたくなります。昔はほめて伸ばすと言いましたが、今はドーパミンを出すために褒めると言ってもいいかもしれません。

以上のことから、先生方がチームで取り組めばどんな学校も立ち直る。どんな先生も立ち直る。どんな学級も立ち直ると考えています。

4 学級満足度

学級満足度と、ストレスや攻撃性の関係を、アンケートで調べてみると、学級満足度が低いと、ストレスや攻撃性が高いことがわかりました。ストレスや攻撃性は、いじめ・不登校・暴力行為などの原因にもなる可能性があります。

裏を返せば、これらの問題に対し個別の生徒指導をするより、学級満足度を高め、問題行動が起こらない予防的な生徒指導が効果的で重要です。友達もいて、先生との関係もよく、行事も活発で、授業もわかる、そんな学級からは、いじめも起きないし、不登校にもなりにくく、暴力事件も起きにくいのです。



5 包括的支援モデル

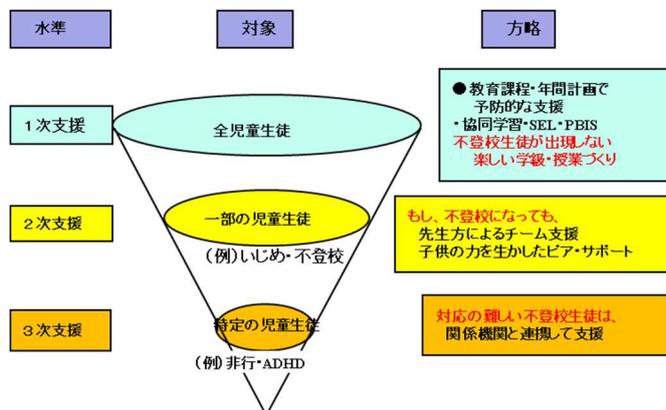
右の図を砂時計と考えてください。

生徒を砂に見立て、生徒が上から落ちてこないように、1次から3次の支援をしていきます。

1次支援は、学校の教育課程全体で全児童生徒に対して予防的に実施していきます。ここでいう教育課程は、数学や体育のような狭い領域ではなくて、学校行事・集会・生徒会活動・総合学習・道徳・HR・部活動の在り方から、構成的グループエンカウンター・ピアサポート、サイコエジュケーション・ソーシャルスキルなどの実施など、かなり広域です。このような活動を通して、人間関係づくりを促進し、学級満足度を向上させていきます。

1次支援をしても、砂時計から落ちてくる生徒には、2次支援で対応します。2次支援では、いじめ、不登校など様々な問題が起きますが、チーム支援で対応します。比較的中学校では、チーム支援は機能している学校が多いように思います。が、小学校・高校では、困難な生徒指導問題を担任一人で抱えている場合が多く感じます。

2次支援をしても、落ちていく生徒には、関係機関と連携した3次支援が必要です。関係機関は、警察・児童相談所・裁判所・病院・大学・福祉機関をはじめ、あらゆる機関を対象としています。どんな状態の子どもも、必ず支援の対象となります。支援構造があまりにも心理学的モデルだと、学校では使い難い場合があります。学校モデルの支援が必要です。



(1) すごろくゲーム(ピア・サポート)

ピア・サポートの一例として「すごろくゲーム」がありますが、これは意図的に人間関係をつなぐことを目的としています。

10分程度でもコミュニケーションは結構とれるものです。人数は、4人一組がちょうどよい数です。

小学生にとっては難しい項目があるため、実施する際には小学校の発達段階に応じて変えて行うようにしてください。

学級開きの時だけでなく、修学旅行の班が決まった時や、保健室登校している子とクラスの子とで実施すると、とってもよい雰囲気になります。

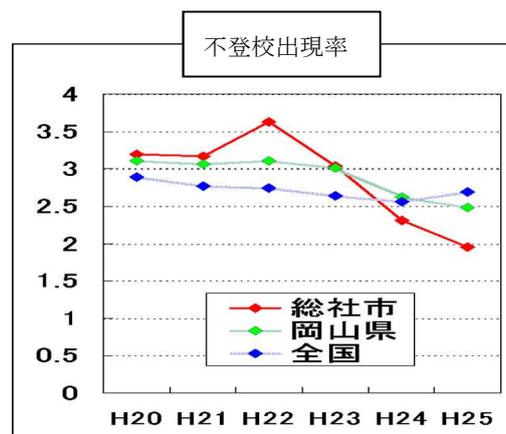
月	4月	5月	6月	7月	9月
テーマ	学級開き	楽しい学級づくり①	楽しい学級づくり②	いじめ	コミュニケーション①
ねらい	入学時の不安を解消する	名前を覚える	友達と楽しく過ごす	いじめの予防をする	コミュニケーションスキルをUPする
ピアサポート	10回 じゃんけん スゴロク	バースディライン ネームゲーム	ペアのフルーツバスケット	いじめの4層構造 チクチク言葉 ほんわか言葉	タコとタイ 似顔絵かき 図形をつたえる

(2) 包括的支援モデルの効果

岡山県総社市では、包括的支援モデルで様々なプログラムを入れており、不登校が激減しているのが見てとれます。

教育課程の中にすごろくゲームを含めピア・サポートプログラムを全市で展開することにより、不登校だけでなく、警察の検挙・補導数も激減しています。学校が楽しいから外で悪いことする必要がなくなっているのです。

クラスが楽しければ学力もアップする。学級ですごく楽しいプログラムを展開すると保健室への来室も少なくなる。そのため、予防的なプログラムの実施を提案しています。



(3) ディスプレーをする生徒と、引きこもる生徒

「ディスプレイ」とは、チンパンジーが仲間に自分の力を見せつけるための行動で、走り回ったり、木を倒したり石を投げたり、大声を出すことです。リーダーとしての確固たる地位を築くための威嚇行動であり、ケンカをせずに力関係を決定する手段でもあります。同じように非行生徒は、髪型、服装で目立とうとし、自分たちの存在を誇示しようとし、反抗的な生徒は、教師に対して暴言を吐いたり、机を蹴ったりすることがありますが、これもディスプレイです。

ディスプレイをする子どもに反して、自分らしさが出せずに引きこもる子どもがいます。小学校から中学校への進学は、大きな環境の変化です。いくつかの小学校6年生が集まって、母体となる中学校に進学します。そこでは、友達関係の変化、教科担任制、部活道、制服など、小学校と違うことが多々あるのです。環境の変化による、自分らしさが出せない体験、引きこもり体験は、子どもだけではなく大人ですら体験する、心理的な特性を持っています。

心理学視点
問題行動を()という概念でとらえる。

- ① ディスプレーとは、チンパンジーが、ケンカをせずに、ボスザルを決める方法
- ② 大きな石を投げたり、奇声を発したり...
- ③ 血を流さず、ボスザルを決める
- ④ (例)高学年が、わざとイキがる。

対応...学校生活で認められる形で、社会的承認欲求、自己表出場面を満たす。

(4) 中1ギャップの原因

小学校6年生から中学校1年生になると、いじめ・不登校・加害生徒数が急激に悪化していきます。加害生徒数とは、暴力を振るう生徒数です。小6から中1になると、いじめは2.5倍、不登校は3倍、加害生徒数は5倍と急増し、これを「中1ギャップ」と呼んでいます。

その発生原因の一つ目は、思春期特有の心理的・生態学的な要因です。二つ目は、環境が変化すると、ディスプレーをする生徒と、引きこもって自分らしさが出せない生徒が増加します。この2つの要因は複雑に重なり合い中1ギャップが起こってきます。

だからこそ、4月・5月にどれだけ丁寧に対応するかが不登校防止にとっても大切であり、スゴロクゲームのように意図的に人と人をつなぐプログラムが効果的です。一人でもいいから話すことができたという友達を意図的に作るのが狙いです。

心理学視点

人間は、環境が変化すると、自分らしさが出せずに、()傾向がある

① 小から中, 中から高は, 大きな環境の変化

② 4月, 5月は, 学級, 友達, 担任が変わる。転校生, 転入生がいる。

対応・・・環境の変化の心理的不安を解消するプログラムの実施

6 学級集団と学力

早稲田大学の河村茂雄先生の開発した、Q-Uという学級満足度調査の研究では、学力と学級満足度の関係が記述されています。

学級集団を、満足型学級・管理型学級・なれあい型学級の3つに分け、学力を調査しています。

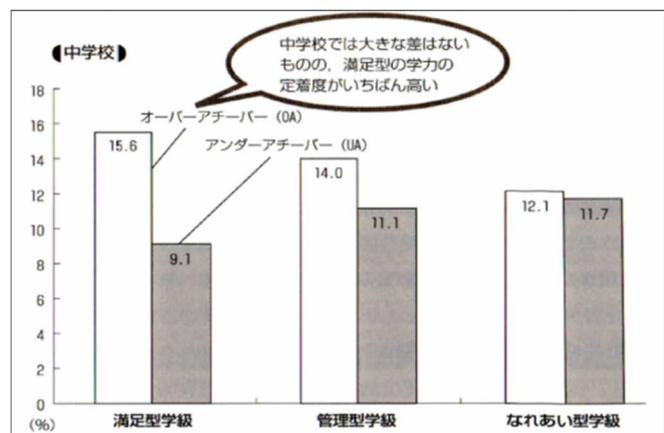
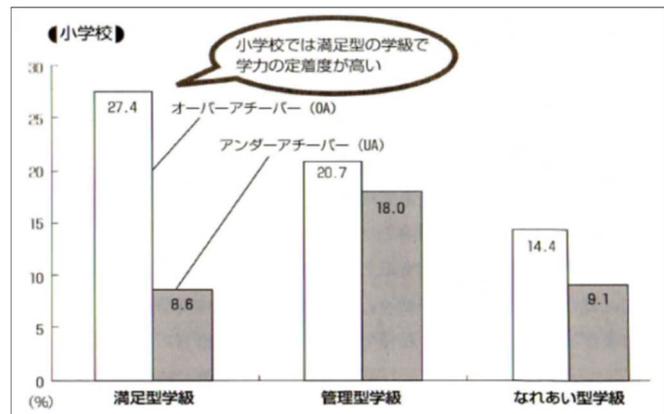
- ・「管理型」学級…先生が何でも管理する。先生が学級のルールの学級。
- ・「なれ合い型」学級…先生と子どもたちが友達みたいになっている学級。
- ・「満足型」学級…うちのクラスは楽しいと感じる学級。

調査の結果、小・中学校ともに、満足度型学級は、オーバーアチーバーの生徒が多いという研究データが報告されています。オーバーアチーバーとは、能力以上の学習成績を出すことで、アンダーアチーバーとは、能力以下の学習成績しか出せないことです。

同様に、河村先生の研究によれば、いじめとの関係も、小・中学校ともに、いじめの出現率が低いのは、満足度型学級が一番で、二番目は管理型学級、三番目はなれあい型学級でした。結論は、満足度型学級は、学力が高く、いじめも少なく、ストレスも少なく、攻撃性も低いのです。

学級満足度とは何でしょうか。それは二つあります。一つ目はクラスにルールがあるということ。二つ目はクラスに友だちがいること。

学級経営による不登校の予防もいじめ予防も、ルールの確立と友達作りを教師が意図的にできていることが重要であるため、いま一度、学級経営見直しが必要なのです。



7 演習

(1) グループチャット

携帯電話を介していじめに発展し、不登校になることが多くなっています。

女の子4人のグループでのグルチャ(グループチャット)の例ですが、これでいじめが起こり、不登校になってしまいました。原因は何でしょう？

A子が最後D子に「何で来るの」と聞いた。それは交通手段のことを聞いていたつもりでしたが、A子は「どうしてあなたが来るの(来なくていいのに)」というふうに聞こえてしまいました。

こういうことがいじめに発展しています。ネットの中で不登校が発生しているということです。

「D子、交通手段は何なの？歩き？それともチャリ？」とか具体的に教えてあげないとだめだということです。

これはどうでしょうか？ぬいぐるみのスタンプが送られ、「このぬいぐるみかわいくない」このあとこれを送った子がいじめにあって不登校になっています。

「かわいくない」って本当は「可愛いよね」というつもりだったのに、「かわいくない」となったからこの子がLINEから外されてしまったわけです。いじめからくる人間関係のトラブルが不登校に発展しました。

子どもたちはなんでも載せてしまうことがあります。予防的なことをしないと手遅れになってしまう1分間で相手を傷つけてしまっているのだよと伝えてほしいです。

「I子はカンニングした」「I子は万引きした」と嘘の情報をLINEで流したらどうなるのでしょうか？犯罪的には何に該当するのでしょうか？名誉棄損罪になる。刑務所に入ることもある。

「I子、うざい」「I子、きもい」何度も書いたらどんな罪になるのでしょうか？侮辱罪になる。侮辱罪は懲役ではなく、拘留にはなります。このような違いなども教えながら子どもたちにネットの使い方を教え、啓発していくことも不登校対策です。なぜならそこから不登校に発展してしまうからです。

(2) インシデントプロセス法による不登校の事例検討

次から次へと質問をしていきますのでみなさんは答えてください。

中学校1年生の男の子A君、5月の連休後から不登校になりました。原因を究明するために質問してください。情報を得て記録してください。その中で判断してください、アセスメントです。一人1個です。

女子四人グループのグルチャの例

A子 「明日、街に、買い物行こうよ」
B子 「いいねー」
C子 「賛成～」
D子 「OK！！」
A子 「D子は何でくるの」

「D子、交通手段は何なのかな？」

「C子は何で来るのかな？歩き？それとも、自転車？」

6年5組仲良しグルチャ(16)

今日のドラえもん、おもしろかったあ...

塾で見てない！これから見よ！



既読 15

このぬいぐるみ、かわいくない

ケータイと犯罪

- ①「I子は、カンニングをした」
「I子は、万引きした」と、嘘の情報をLINEで発信したりするとどうなるのか？
- ②「I子、うざい」「I子、きもい」と、クラスのグルチャで何度も書いた場合はどうなるのか？

Q成績は？

Aとてもよい。

Q友達関係は？

A同じ小学校からきた男子生徒といっしょだったので良好です。

Q部活は？

A帰宅部

Q家族構成は？

Aおばあちゃんがあります。お父さん、お母さん、弟、A君です。

Q先生担任は？

A体育の女の先生です。とても熱心な学年主任でした。

Qアンケートに何か書いていませんでしたか？

A5月の連休明けだったのでアンケートはやっていませんでした。書いていませんでした。

Q小学校のときの出席状況は？

A小学校無欠席

Q夜は何時ごろに寝ていたのでしょうか？

A夜更かししてなかった。不登校が続くようになってから昼夜逆転現象になりました。

Q4月の出席状況は？

A良好です。5月の連休後からぱったり来なくなってしまいました。

Qこの子の性格は？

A明るい性格 ユーモアのある子でした。

Q両親ともに仕事はしていますか？

Aお父さんはエンジニア、お母さんは専業主婦

Q家族関係は？

A良好でなかった。おばあちゃんがうるさい人でした。

Qクラスの中で、同じ小学校以外で仲のよかった子は？

Aほかの小学校の子たちとも分け隔てなく接していました。

Qゲームはよくしますか？

Aゲームは好きな子です。

Q休み時間何をしていましたか？

Aほかの男子生徒と戯れていました。

Q発達障害はなかったか？

A発達障害など感じることはありませんでした。極めて普通の子でした。

Qクラスでいじめられていませんでしたか？

Aいじめはなかった。

Q何か変わったことは？

A何もありません。変わったことがなかったので困っています。

Q携帯は？

A携帯は持っていません。

Qこの子の身体的特徴は？

A身長は高いほうでした。少し小太り、体育が苦手というわけではありませんでした。

Q家庭でのネット環境は？

Aネット依存ではなかった。

Q父親とはうまくいっていましたか？

A父親とはそんなにうまくいっていませんでした。

Q食事はきちんととっていたか？

A引きこもるようになってからは、お母さんが部屋の前まで持って行く。A君が、食べた後部屋の前に出ずようになった。

Q家での生活の様子は？

Aプロレスのビデオを観ていた。ゲームとかも少しはやっていました。ゲームにこだわっていたわけではありません。

Q習い事は？

A習い事はしていませんでした。

Q出身小学校と中学校の規模の違いは？

A小学校は4クラスぐらい。中学校は1学年8クラスでした。

Q親友はいましたか？

A仲の良い友達はいました。

Q弟との関係はどうでしたか？

A弟との関係はよくなかった。

ではグループで相談してみましよう。なぜ、不登校になっているのでしょうか。

まだ、情報が欲しいですね。今分かっていることはおばあちゃんがいて、お父さんがいてお母さんがいて、A君がいて弟がいるという家族構成ですね。A君は5月の連休明けからずっと不登校だということです。

アセスメントです。診断をしていきましょう。どこの情報が足りませんか？

QA君と弟は実の兄弟ですか？

AA君と弟は実の弟です。だけど仲が悪いです。

Qおばあさんとは最近どんな様子ですか？

Aおばあさんは力のある方です。おばあちゃんは、不登校の責任はお母さんにあるとガンガン言う。

Q弟とはいつから仲が悪いのですか？

A弟とは4年前ぐらいからずっと仲が悪い。

Qおばあちゃんとお母さんの関係は？

Aおばあちゃんとお母さんの関係は極めて劣悪です。

お母さんはおばあちゃんに我が子をとられたと言っているし、おばあちゃんは、不登校の責任はお母さんにあるという。親戚付き合いも全部おばあちゃんがするという。

Q彼が孤食になったのはいつからですか？

A担任の先生がくると嫌がるようになった。日中寝るようになった。昼夜逆転になった。

Q弟には手がかけられますか？

A弟には手がかけられます。

Q弟はいくつで、障害がありますか？

A弟はA君と1歳違いで小学校6年です。弟も不登校です。

Qお母さんとおばあちゃんの仲の悪さに対して、お父さんはどんな関わり方をしていますか？

Aイニシアチブのとれないお父さんです。

Q A君に身体症状があらわれたり、体を壊したりするようなことがあったのですか？

A 登校刺激をしたときの部屋に鍵をかけて誰も入れないようにしていました。壁にバンバン頭をぶつけたりしていました。家庭内暴力をするようになりました。

Q A君は家庭の中で居場所があったのでしょうか？

A この当時はありませんでした。

兄弟で不登校になったときは、学校でなくてほぼ家庭が要因。なぜA君は不登校になったか相談してみましよう。だれか弟について質問してくれませんか？

Q 弟は手がかかると言っていました、弟はどんな性格ですか？

A 弟は小学校4、5、6年と不登校、そして年子です。

ここまでくればなぜA君が不登校になったかわかるのではないのでしょうか。

お父さんとお母さんは弟が不登校になったので、カウンセラーのところにも、病院へも行った。どこへ行っても上手くいかない。そして無理やり学校へ連れてきたこともあった。そしたら、弟は学校の前でひきつけを起こして来られなくなった。それから弟を学校へ連れてくるのを諦めました。それからへんてこな宗教の壺まで買った。そんなまじめな親だった。なぜA君は不登校なのか、相談してください。

(参加者) おばあちゃんとお母さんの関係が悪くてA君は疲れてしまった。

(参加者) 「おばあちゃんとお母さんの関係が悪くてA君は疲れてしまった」からA君は不登校になってしまった。

(金山教授) もう一声ないですか。

(参加者) 弟が不登校のときは、両親の関心は弟にいつているので自分が不登校になれば関心を持ってもらえと思った。兄弟の不登校の連鎖。

(金山教授) 正解です。

A君は中1、弟は年子なので小6。小4から不登校になっていたのも全ての関心が弟にいつているのです。A君が中学校へいったら中1ギャップも伴います。A君は無意識のうちに「自分も不登校になったらかまってもらえるのでは？」と思った。それでA君は不登校になった。そしたら弟はどうして不登校になったか、相談してみましよう。

(参加者) 「おばあちゃんとお母さんの中が悪い、お母さんを守るために不登校になった」

(金山教授) 正解。

お母さんを守る為に不登校になった。弟も無意識の中で不登校になった。お母さんの側にいようと無意識に行動しているのです。じゃあ、この家族をどうやって改善させるのか。おばあちゃんを老人ホームにいれるというのはダメ。この家は二世帯住宅に住んでいる。

(参加者) 「お父さんの存在が見えないということがあったので、お父さんにカウンセリングを受けてもらおう。お父さんの家庭での位置を確立する」

(金山教授) 素晴らしい。

<家族でキャンプ>

夏休みに家族でキャンプに行ってもらうことにした。お母さんの実家のほうでキャンプすることになった。おばあちゃんには遠慮してもらった。4人家族の中でおばあちゃんの影響がなくて、お父さんの機能を回復するようなアプローチをした。Aのカウンセリングを行い。少しずつ昼夜逆転がなおってきた。Aはプロレ

スが好きなことがわかった。

<学校祭前日の夜の登校>

Aと公園に行き遅くなったので一緒にラーメン屋に行った。ラーメン屋のご主人が不登校の子だと知らずに「そろそろ学校祭があるよな？」と問いかけた。A君は学校祭のことなど知らなかったので、「学校祭覗いてみるか」と私が誘ってみた。次の日学校祭へ行った。教室のプラネタリウムを見た。教室へ入って座席の名前を見つけた。A君が長期に休んでいたが、担任の配慮があった。自分が生活係なのだとして理解した。自分が休んでいることを小黒板を見て認識した。だけど、不登校は続いていた。

<東京へのプロレス観戦>

プロレスを見に東京へ行くと言いだした。案の定おばあちゃんは反対でした。お父さんはどうして良いかわからなかった。お母さんが一人で東京へ行かせようと言った。お父さんと一っしょにネットで見て行き方を探して東京まで一人で行くことになった。また1つ、一歩足を踏み出せた。A君をお父さんお母さんも応援している。

<再登校>

4月になって新しい担任になった。担任の先生が家庭訪問して、Aに制服を着せたが、太っていて制服が合わなかった。夜の事前登校でAは自分の席を確認した。再登校当初は保健室登校だったが、だんだん教室へ行けるようになった。Aは2年生から来られるようになった。弟も登校することになった。おばあちゃんからお母さんを守る必要がなくなったからです。二人とも高校へ進学した。最終的に京都の有名大学へいった。あるとき、講演会があって、不登校親の会に呼ばれた。不登校の講演会の前に事例発表があった。その事例を発表していたのが、A君の両親だった。僕はこの時はじめてこのA君たちがこんなに立派になったということを知った。どんな不登校たちも可能性があることを教えて貰った。兄弟で不登校になっているときは、家族に問題がある。だから、家族を変化させるというアプローチが必要です。

(3) ジョハリの窓

「小さかったころに」というのを見てください。6人一組になり、名前を確認して順番を決める。一番の「〇〇さんの小さかった頃は？」と皆さんで大きな声で尋ねる。〇〇さんは「ぼくの小さかった頃は～です」と答える。「もの知り系の子だった」「おとなしい子だった」「いたずらっ子だった」「活発な子だった」「大人っぽい子だった」の中から指をさす。その次は「△△さんの小さかった頃は？」と言ひ、順番に全員が行う。

各グループで演習

子どもたちがお互いの自己開示できるエクササイズ。不登校の予防にも使える。

8 終わりに ～子どもへの対応方法～

(1) 納得と説得は違う。

説得しても子どもは変わらない。納得してはじめて動き出す。私たちは子どもを納得できる技を持たなければならないということ。

(2) 個は集団で育まれる。

引きこもって10年たっても何も育まれない。集団の中ではいろんなトラブルがある。そのトラブルの中でこそ子どもたちを育んでいかなければならない。集団はとても大切です。

(3) ソーシャルボンド

誰かと誰かを、意図的に教師が繋げていく、最後の「ジョハリの窓」も繋げていくプログラム。

意図的に繋げていくことが不登校対策に最も大切な、予防的なものになると考える。

(4) 生き方（価値）をリードするアプローチ

背中を押して、言葉を大切にしようよということ。

(例)ピンチをチャンスに変える

時間の使い方は、命の使い方

日々の選択が、人生を決める

(5) 発達課題は成長課題

小学校の発達課題はよく遊ぶこと。大学生の発達課題は生き方を見つけること。わたしたちの発達課題はなんのでしょうか。みんないろいろな悩みがあり、それが発達課題なのです。学校のこと、子供のこと、家族のこと、介護のこと、様々な悩みがありそれが発達課題なのです。発達課題から逃げずに頑張っていきましょう。発達課題は成長課題なのです。発達課題から逃げないことが大切です。

○ 質疑応答

(参加者)

大切なことは体制をどう作るか。今日学んだことは帰ってからどれだけ広がるか、それが大事だと思う。アドバイスいただけたらと思う。

(金山教授)

不登校対策で一番大事なのは、不登校対策のシステム作り。仲間を3人作ってほしい。1人だとシステムを作るのは大変だが3人いればなんとかなる。教育課程に子ども同士を繋げる年間計画を入れられるかどうか勝負の分かれ目。不登校対策委員会がきちんと機能しているかどうか大切。

(参加者)

最近子供が幼くなっている。本来6年生で完了していることを中1でしないといけない、というようなことはないか？（幼さに起因している問題はないか？）

(金山教授)

今、大学では学生同士が繋がらなくて困っている。大学の食堂にはついたてがあり、孤食になっている。どもにも「便所飯」と言ってコンビニ弁当をトイレで食べている。今の子どもはみんなゲームをしている。ゲームだけだと子ども同士繋がらない。昔は外で野球やサッカーなどをして、色々なルールを自分たちで作っていた。繋がるのがとても難しい時代になっている。学校教育が大変重要になっている。学校の中で意図的に教師が子どもたち同士を繋げていかなければならない。

(参加者)

今、担任している子どもで、小5で発達障害があり不登校。母親は「本人が嫌なら学校は行かせません」と言っている。本人は、家庭で好きなことしかしていない状況である。母親がPCやタブレットを買い与えネット上で繋がろうとしている。昼夜逆転。母親はカウンセリングを受けておられるが、なかなかうまくいかない。シングルマザーである。どのようにアプローチしていけばよいか。

(金山教授)

発達障害の子の保護者も発達障害である場合がある。そんな母親に子どもの話をしてもなかなか通じないことがある。お母さんを慰労するようなカウンセリングをする。ネガティブな情報しか入らない母親の根本的な悩みを受け止める。そうすれば振り向いてくれるかもしれない。深く入り込めるかわからないが、母親自身を支えることが必要だと考える。子どものことばかりでなく、母親へのカウンセリングをする。そして母親自身のサポートをする。家族支援の総合的な取り組みを継続して取り組んでいただきたい。